

# 『ルース』の表層と深層 —— 「更生」から「救い」へ ——

鮎澤 乗光

*Ruth* という作品は、いわゆる「墜ちた女」小説としての社会批評的な観点からと、作者のキリスト教信仰、福音主義の立場にたつ慈善的な社会改良の観点から評価され、論じられている。しかし、『ルース』にはそうした“the Condition-of-England novels” 的、社会小説的な要素や社会改良の要素とは異なる別の要素が存在する。前者の要素はこの作品のいわば表層部を形成しており、それとは異なる、ルースの信仰、罪と試練、救いといった個人的、内面的な要素が深層部として内在し、やがてそれが突出して、表層に取って代わって、小説の質を変えてしまう。

Elizabeth Cleghorn Gaskell の小説作品では、こうした表層と深層が細密に絡み合わさっていて、それが作品のある結節点において、その絡み合った展開を急転換させ、表層を超えて、深層に新たな変貌を与える、ということが起こる。例えば、*Mary Barton* という作品ではどうか。この作品の表層部では、1840年代のいわゆる飢餓の時代における労働者と資本家の対立、貧困という社会的な背景において、チャーティスト運動を初めとした様々な社会状況下の労働者や工場経営者の個人的な生活がリアルに扱われている。それが、18章最後の部分を結節点として、作品は労使の対立という社会小説的表層部から新たなテーマ、「復讐」と「試練」といういわば個人的生のテーマ、あるいは信仰のテーマが展開される深層部へと急転換する。語り手のまなざしは表層の社会的な批判から深層に潜在していた信仰へと向けられる。

Mr Carson stood on the step, dreading to shut out the light and air, and return into the haunted, gloomy house.

‘My son! my son!’ he said, at last. ‘But you shall be avenged, my poor, murdered boy.’

Ay! to avenge his wrongs the murderer had singled out his victim, and with one fell action, taken away the life that God had given. To avenge his child's death, the old man lived on; with the single purpose in his heart, of vengeance on the murderer. True, his vengeance was sanctioned by law, but was it the less revenge?

Are we worshippers of Christ? or of Alecto?

Oh! Orestes! you would have made a very tolerable Christian of the nineteenth century! (266)

信仰という個人的なテーマは、作品の初めから労使の対立という公の社会状況下における、親子関係、恋愛、誘惑、暴力と博愛といった対立の中で一貫して描かれてきたが、18章のこの結節点から、私的な問題、信仰と愛他主義的行為に移行し、多神教ではなくキリスト教という一神教の下での殺人と復讐のテーマが追求され、そこに労使の対立の解決、解消の糸口が求められる。

それでは『ルース』についてはどうか？ 結論から先にいえば、ルースのいわゆる「罪」からの更生という表層のドラマから、深層に潜在する、救いという宗教的な生のドラマが変質し、深化し、表層へと出現し、取って代わる展開といえるであろう。

ルースの「墮落」の原因は何か？ それは、彼女が美しく、男性を引きつける魅力を持ち、精神的にも肉体的にも無垢な女性であるからである。また、innocence、すなわち、「無垢」、「清純」、「無知」、「世間知らず」という点で外部からの暴力を誘発しやすく、それに対して無自覚で、無防備である。これが彼女の「墮落」の罪の原因になる。そして、語り手は読者に呼びかける方法、囁呼法によって、彼女を庇護し、救う存在であるはずの神（々）の不在、あるいは教育の不備を嘆く。

How delightfully happy the plan made her through the coming week! She was too young when her mother died to have received any cautions or words of advice respecting *the subject of a woman's life*—.... *Ruth was innocent and snow-pure*. She had heard of falling in love, but did not know the signs and symptoms thereof; nor, indeed, had she troubled her head much about them. Sorrow had filled up

her days, to the exclusion of all lighter thoughts than the consideration of present duties, and the remembrance of the happy time which had been. But the interval of blank, after the loss of her mother and during her father's life-in-death, had made her all the more ready to value and cling to sympathy—first from Jenny, and now from Mr. Bellingham. (下線筆者, 43-44)

ルースは母の思い出が残る Milham Grange へ Bellingham と行く約束をしてしまう。ルースはこの計画に有頂天である。そのために、教会に行くことを断念する。母親は “the subject of a woman's life” についての知識をルースに何も教えずに死ぬ。語り手は当時の女性の性教育の欠陥を示し、“Ruth was innocent and snow-pure” と言い、母の教育の不在がルースの罪を生んだ、と訴える。それに、当時の労働者階級の若い娘の過酷な労働が加わる。

この引用箇所には、もう一つの語りの層が潜在している。ルースの過ちの社会的な要因とは別に、語り手は「語らないこと」によって、ルースの罪を暗示する。それは、ルースの内面における神の不在の暗示である。この頃のルースにとって、信仰は自覚的なものではなく、従って、彼女の苦しい生活を支える “sympathy” にはなり得ず、神の存在は友人の Jenny やベリンガムのそれより軽い。語り手は、ルースの抱く “this week's dream of happiness” を罪の予兆として読者に示している。語り手がルースを “innocent” というとき、それは “sympathy” (憐れみ) の源泉であるべき神の存在に対する「無知」でもある。ギヤスケルはルースの「墮落」、罪のありかを初めからこのように示唆している。

ルースの罪は、『メアリー・バートン』において Esther が姪のメアリーを Jem に対して擁護する言葉によって表されている。“You can yet save Mary. You must. She is innocent, except for the great error of loving one above her in station.” (下線筆者, 213) ここで、エスタの言う “the great error” とは、二つの過ちを表している。一つは神の定めた秩序を逸脱する欲望を抱いて、身分違いの男性の餌食になりかけている罪に通じる過ち。もう一つは、そのようなキリスト教の教えに基づく社会体制を支える社会道徳に反する罪に通じる過ちである。エスタは後者の考えに立って、メアリーの過ちはジェムという善良な他者の力で「救われる」と信じる。しかし、ルースを助けるのは、Benson という牧師であり、彼はベリンガムの卑

劣な行為に憤りながら “the subject of a woman’s life” (43) を知っており、ルースを語り手と同じように神の前の罪人と見なしている。

このような社会、世間が認める「罪」は、キリスト教の教えを踏まえた社会秩序にとって危険な行為である。世間、社会は過ちを犯したルースを社会的偏見、処女性へのこだわり、偽善的な道德観、いわゆる性の二重標準に基づいて非難する。Mrs. Bellingham や Bradshaw は世間、社会体制の典型であり、彼らに代表される社会、世間は迫害者であるはずのベリンガムには寛大である。『ルース』に限らず、ギヤスケルのその他の作品、『メアリー・バートン』や “Lizzie Leigh” においても、加害者である男性は社会的な非難をほとんど受けることもなく、被害者からの抗議や憎しみすらほとんど受けない。また、罪の意識やその苦悩もない。息子を一方的にルースから引き離すベリンガム夫人の手紙は、社会や世間の「罪」の観念の正体であり、それに対する反応の典型である。

My son, on recovering from his illness, is, I thank God, happily conscious of the sinful way in which he has been living with you. By his earnest desire, and in order to avoid seeing you again, we are on the point of leaving this place; but, before I go, I wish to exhort you to repentance, and to remind you that you will not have your own guilt alone upon your head, but that of any young man whom you may succeed in entrapping into vice. I shall pray that you may turn to an honest life, and I strongly recommend you, if indeed you are not ‘dead in trespasses and sins,’ to enter some penitentiary. In accordance with my son’s wishes, I forward you in this envelope a bank-note of fifty pounds. (91-92)

夫人は息子が guilty、罪を犯したとは認めない。二重標準によって、性はタブー視され、女性の側の罪と見なされている。息子は世間に数多くいる sinful な女の犠牲者なのだ。ここには、「罪」をめぐる社会通念とルースの信仰上の「罪」との意識のズレが批判的に暴露されている。それゆえ、“repentance”、「悔い改める」行為にも、後に述べるように、夫人とルースの間では根本的な違いがある。息子はあなたの罪で悪に誘い込まれた犠牲者だ。あなたは犯した “guilt”、罪を悔い改め、“penitentiary”、感化院、売春婦更生所に入り、まっとうな女性に戻り、社会

に復帰せよ。後のことはお金で解決します。これがベリンガム夫人の慈悲深いお説教である。そして、それが「堕ちた女」に対する社会の「更生」の意味でもある。

ベリンガム夫人は息子の行為を認識しているので、まだルースに対して寛大である。これがブラッドショーになると、ルースの犯した「罪」に対してさらに厳しいものになる。ヴィクトリア朝社会の道徳の体現者を自認する彼はルースの実情を知ることもなく、ルースを娘の家庭教師に推薦したベンスンを非難し、絶交までしてしまう。偽善的な父の考え方を娘の Jemima も最初のうちは無批判に受け継いでいる。彼女は許婚者の Farquhar とルースの関係を疑い、迷える子羊に対して、キリストのような「知恵と優しさに満ちた憐れみ」“a pity so Christ-like as to have both wisdom and tenderness” (320) をもって接するのではなく、「おのき震え、尻込みしてしまう」。

ジェマイマは、しかし、まもなくルースに対する考え方を改める。それは、次のような彼女の言葉に表れている。

With a father and mother, and home and careful friends, I am not likely to be tempted like Ruth; ... if you knew all I have been thinking and feeling this last year, you would see how I have yielded to every temptation that was able to come to me; ... and how I might just have been like Ruth, or rather worse than she ever was, because I am more headstrong and passionate by nature, I do so thank you and love you for what you did for her! And will you tell me really and truly now If I can ever do anything for Ruth? (傍線筆者, 361-62)

ジェマイマのこの言葉には、牧師ベンスンと作者の、キリスト教に基づく慈善活動や博愛主義的な考え方を支える基本的な態度、弱者や、心ならず罪を犯してしまった人々への慈愛と憐れみの思想が表れている。“what you did for her”、それはこの作品においてルースの更生、「墮落」の罪が社会的に贖われる過程において、彼女を理解し、手助けすることである。ルース自身もそれに応え、試練に耐え、愛他的な行動を積み、次第に周りの人々から同情を得て行く。彼らの同情はやがて尊敬の念へと変質する。それがルースの更生である。しかし、ジェマイマやベンスンですら、それ以上のことはできない。ルースの魂の救いは彼女自身

の問題だからである。

ルースの「墮落」の罪はすでに述べたように、第一に、キリスト教の教えとそれを反映する社会の道徳に反する行為である。この罪の意識は、献身的な行為によって「更生」という解決への道を開く。しかし、さらにもう一つ、上記の「罪」とは異なる決定的な罪がある。それはベリンガムを神と同等に愛したこと、自己の作り出した偶像としてのベリンガムを愛したことである。(それ故、罪の主体は一方的にルース本人にあり、ベリンガムや社会の秩序にあるのではない。) 偶像崇拜の罪は the subject of a woman's life に通じるが、ルースにとってそれは信仰上の「罪」、神を見捨てた罪である。

ルースのベリンガムへの愛は、それが純粋であればあるほど、また強ければ強いほど、神への裏切りの度合いを強め、深めて行く。ルースの苦悩は、社会の批判に起因するのではなく、この信仰と愛の二律背反を克服できないことに根ざしている。後にベリンガムに再会した時、ルースは Leonard の父親としての彼への恋慕の情をよみがえらせ、その “a depth of sin” (271) に苦悩する。その後、彼女は神との対話、祈りを通して、“God's law” (273) に従うことを決意して、ベリンガムへの恋慕を断ち切って行く。かつては神にも勝った彼の支配力 “power” は失われ、“the idol of her youth” (286) は彼から離れてしまう。ルースの苦悩、自己との戦いは、ルースの内面の祈りを通しての吐露という形で、彼女の内面に寄り添った語り手によって示される。しかし、レナードは彼の子であるという事実はルースを支配し、彼に代わる偶像としてのレナードへの愛は依然として残されたままである。

ルースにとっての「罪」と「罰」の深層が作品の中で顕現されるのは最後の三章においてである。ルースは発疹チフスが全国に流行した時、町の診療所の婦長として働くことを申し出て、その献身的な看護によって、更生し、社会の尊敬を受ける。そして、病院の “the Board” (429) が決議した、the Secretary to the infirmary からの公式の感謝状、“a formal letter” が、“the rector of Eccleston” によって、レナード達に読み上げられ、手渡される。ルースの社会復帰はこのように物々しい、儀式を思わせる一連の手続きを通して認定され、宣言される。この客観的な事実描写において、読者は、たとえば the Board という言葉で、ディケンズの *Oliver Twist* の第二章に登場する救貧院の the Board を想起するであろうし、

“benevolence”「善意、博愛」の権化のような教区司祭に社会の上層構成員達を想像するであろう。更生の物語としての作品はこの時点で大団円を迎えるが、それは作者の痛烈な皮肉と批判を内包する、いわば宙づり状態の終焉である。

事実、第33章の終わりにおいて、レナードはベンスンと連れだって、病院が建っている通りに出かけて、貧者たちの愛と尊敬に包まれた母の姿に圧倒される。その時、一人の老人の話に耳にする。

“Such a one as her has never been a great sinner; nor does she do her work as a penance, but for the love of God, and of the blessed Jesus. She will be in the light of God’s countenance when you and I will be standing afar off. I tell you, man, when my poor wench died, as no one would come near, her head lay at that hour on this woman’s sweet breast. I could fell you,” the old man went on, lifting his shaking arm, “for calling that woman a great sinner. The blessing of them who were ready to perish is upon her. (下線筆者, 425)

「更生」とは「社会復帰」であり、世間、社会がルースをどうみなすか、どのように判断し、受け入れるかということである。引用の老人の言葉にはそのような更生に対する皮肉が込められている。ルースの更生を称賛する人々は彼女の行為を“penance”、“a great sinner”の「罪滅ぼしの苦行、懺悔」だという。しかし、周りの人々がその言葉を世間に対する懺悔、という意味で使っていることを老人は見抜いている。老人は彼女の行為が社会復帰のための「罪の償い」ではなく、“for the love of God, and of the blessed Jesus”「神の愛、聖なるイエスの愛故に」、この仕事を引き受けているのだと、感じ取っている。そして、人々の口にする「罪の償い」が社会的更生を意味するもので、老人の言葉が意味することは全く異なったものであることも明らかである。

社会的容認が保証された事実は明白であるが、それが宗教的贖罪に至っているか否かは疑問である。つまり、神は真にルースの「罪」をお許しになっているのか？ この疑問に他者は肯定的な答えを出すことはできない。ルースは愛他的な行為の実践という試練を乗り越えることによって社会復帰を容認され、更生するが、神の許しを感知していない。先のレナードに代表される世間の高揚した賞賛

の声と尊敬の視線にもかかわらず、ルースの内面はほとんど提示されていない。

They each vied with the other in the tenderest cares. They hastened tea; they wheeled the sofa to the fire; they made her lie down; and to all she submitted with the docility of a child; and, when the candles came, even Mr. Benson's anxious eye could see no change in her looks, but that she seemed a little paler. The eyes were as full of spiritual light, the gently parted lips as rosy, and the smile, if more rare, yet as sweet as ever. (下線筆者, 426-27)

これは、看護の役目を終えて病院から戻ったルースを彼女の理解者たちが迎える場面である。それは日常的な現実の一場面というより、何か神秘的な雰囲気がただよう宗教画の一場面さえ思わせる。ここでは、ベンスン（たち）に寄り添った語り手の客観的な描写（例えば、seemed、仮定法の使用による語り手の印象）と、この場面の宗教的雰囲気を暗示するかのような言葉（例えば、docility、a little paler、spiritual light、the smile、sweet）のほか、ルースの内面は一切描かれず、ルースが自身の行為と世間の（貧民たちの）賞賛に満足を感じたり、影響を受けたりしていないことは確かだ。憔悴した、従順な魂は何者かを待ち望んでいるようにも思われる。

さて、第34章、“I must go and nurse Mr. Bellingham”と題されている章において、ルースの内面に起こる急展開を見てみよう。それはルースの言葉でもある(436)。しかし、医者 Davis はルースがベリンガムの看護に行くことに反対する。(看護は全く無用なこと。もはや疫病の猛威は治まっているばかりでなく、患者はロンドンの病院で、専門的な看護を受けられる。そればかりか、ルースの体は衰弱の極に達している。)しかし、ルースはベリンガムがレナードの父親だと告白する。今になって、なぜ秘密にしていた事実を自ら暴露するのか？ もはやその事実を隠す必要はなく、ベンスン達のルースをかばうための虚偽は対社会、世間的な意味しか持たない。また、ベリンガムがレナードの父親であることは何を意味するのか？ 彼女にとってベリンガムの病気の看護は、神の御意志であり、彼女の愛他主義とレナードの父親としてのベリンガムへの個人的愛情をはるかに超えた、神がルースに与えた信仰上の試練なのだ。



デイヴィスはルースに今もこの男を愛しているのか（437）と聞くが、ルースの決意を反転させて、「もしルースが看護に行かなかったなら？」と仮定してみよう。それは彼女がベリンガムを非難し、弾劾していることを意味する。ベリンガムへの性愛、あるいは神と同等に愛の対象とする欲求の残滓を、彼女が未だ捨てきれずにいることを意味する。彼が道徳的に加害者であり、自分は被害者であることを明言していることになる。ルースにとって、ベリンガムの看護は、それ自体神によって与えられた試練、「贖罪の試練」であり、彼に対して愛を感じたとしても、その愛は神を介しての、神の創造物である他者に対する愛である。

さらに、「レナードの父親であるベリンガムを見捨てることは出来ない」というルースの主張は、何を意味するのか。ルースはベリンガムを神と同等に愛したという罪を犯す。その上、彼はレナードの父親であり、レナードはベリンガムに取って代わり、偶像となっている。実は、レナードの偶像化は、ベリンガムが墮ちた偶像になった時から始まっている。それはルースにとって宗教的な危機の瞬間である。我が子レナードへの愛は無意識のうちに、神、“the All-knowing, who read her heart”（207）への愛にまで高められる。そして、このレナードへの愛は、ルースに死を賭してベリンガムの看護へおもむかせ、ルースの魂の救済へと至らせる。最後にルースの臨終の場面を見てみよう。

It might be that, utterly exhausted by watching and nursing, first in the hospital, and then by the bedside of her former lover, the power of her constitution was worn out; or, it might be, her gentle, pliant sweetness, but she displayed no outrage or discord even in her delirium.... The watchers could not touch her with their sympathy, or come near her in her dim world; .... She never looked at any one with the slightest glimpse of memory or intelligence in her face; no, not even Leonard.

Her strength faded day by day; .... Two days she lingered thus—all but gone from them, and yet still there.

They stood around her bedside, not speaking, or sighing, or moaning; they were too much awed by the exquisite peacefulness of her look for that. Suddenly she opened wide her eyes, and gazed intently forwards, as if she saw some happy vision....

“I see the Light coming,” said she. “The Light is coming,” she said. And, raising herself slowly, she stretched out her arms, and then fell back, very still for evermore.  
(下線筆者, 443-44)

これは彼女の魂の救済が果たされたことを暗示する場面であり、彼女の更生が成就された場面と類似している。ここでも語り手はあくまでも客観的な事実描写に終始する。死の直前の“delirium”の状態から、“a sweet childlike insanity within”へと移ろうルースは、周りの人々との心の交流、“sympathy”さえ断ち切り、レナードにすら気づかず、また最愛の我が子である彼を覚えていない。ルースはレナードではなく神を見ている。(ルースは復活するキリストになぞらえられ、)周りの人々は“her dim world”にいる彼女に共感を持って触れることも、近づくことさえもできない。この場面は、先の引用文で老人が言った言葉、“She will be in the light of God’s countenance when you and I will be standing afar off.” (425) を思い起こさせる。(上の引用文では省略されているが)、watchers は、初めてルースが歌を歌っていることに気づく。それは母が死の床で教えた歌であり、母の死とともに忘れられた歌である。彼女は失われた innocence を取り戻し、近づいてくる the Light に両手を伸ばして、息絶える。この the Light は、再び先の引用で老人が言う言葉と共鳴する。ルースは彼女の更生を喜び、迎える人々からさえ遠いところに到達している。

この作品の深層は、ルースがベリンガムと神との間に引き裂かれ、神を裏切る罪を犯し、最終的に神のもとに帰って行く過程、即ち、ルースの人生、神の計画の中のルースの人生を描いたものと考えられる。この観点から再度 34 章以降のルースの精神の過程を見してみるなら、そこに、*Sylvia’s Lovers* や『メアリー・バートン』などにも通じる、ギヤスケル文学の基本的な構造が現れてくる。それは、社会小説、「墮ちた女」小説としての表層における更生のテーマから、信仰という深層でしか達成できない魂の救いへの飛躍である。

## 注

本稿は日本ギaskell協会第 29 回例会（2017 年 6 月 3 日）での講演に加筆修正を施したものである。本講演の機会を与えて下さった日本ギaskell協会の方々に厚くお礼を申し上げます。

なお、使用したテキストは以下のものである。

*Gaskell, Elizabeth, Ruth*. Edited by Margaret Lane, Everyman's Library, J. M. Dent, 1967.

— . *Mary Barton*. Edited by Stephen Gill, Penguin, 1970.

(元東京女子大学教授)

## **The Two Subjects of *Ruth* — Reclamation and Salvation**

**Norimitsu AYUZAWA**

The novels of Elizabeth Gaskell deal with various issues arising out of her critical attitude toward Victorian morality, social reforms and Christian philanthropy. *Ruth* has been discussed in the light of this subject: problems about “the fallen woman question,” sexual inequality based on the double standard, the moral and social education of laborers, women’s situations in the period in which the novel is set, and so on. These problems are depicted by the authorial, objective narrator on the surface of the novel; and they reach harmonious, or subtle solutions: Ruth’s reclamation is accepted by society, though it is so rare in other Victorian novels.

But *Ruth* has another subject, apart from what the Condition-of-England novels depict. This subject is dealt with in the depth of the novel in which not only social conventions and moral hypocrisy but also good intentions, grace and various reforms in society, or even Unitarian benevolence are radically criticized. It lies first hidden beneath the surface, and later gradually begins to come to light through the interpolated comments from the narrator (unlike the narrator mentioned above) close to the heroine’s heart, and through her dialogue with God, her confessions and her prayers. This progress starts at an epiphanic moment and from this point, Ruth transcends those who approve her reclamation and come to respect her, and she saves her own soul and attains redemption in atonement for her sin. In this essay we will discuss this radical development of the work beginning with Ruth’s fall and ending in her salvation.